食道胃接合部腺癌および食道腺癌にけるリンパ節転移の危険因子に関する観察研究

研究対象：

2000 年 1 月 1 日から 2014 年 10 月 31 日の間に国立がん研究センター中央病院において食道胃接合部腺がんと食道腺がんと診断され、外科切除もしくは内視鏡切除された方々の診療録を対象とし、食道胃接合部腺がんと食道腺がんにおけるリンパ節転移状況を調査し、転移の危険因子を明らかにするための情報収集を試みます。

研究の概要：

バレット食道は、繰り返す胃酸や胆汁の逆流により発生し、がんの発生母地になることが知られています。ここに発生するバレット食道がんは、欧米において最も急速に増加しているがんですが、本邦においてもヘリコバクターピロリ感染率の低下とともに増加が懸念されています。一方、食道胃接合部がんは、規約において“食道胃接合部の上下 2cm 以内にがん腫の中心があるもの”と定義されています。この領域に発生するがんには、ヘリコバクターピロリ感染により萎縮や腸上皮化生を来した粘膜を拝啓に発生するがんと胃酸や胆汁の逆流による炎症を背景に発生するがんがあると考えられています。

ヘリコバクターピロリ感染に関連し発生するがんが多くを占める胃がんでは、多数の外科切除例を元に UL(-)の分化型 cT1a、3cm 以下の UL(+)の分化型 T1a、2cm 以下の UL(-)未分化型 T1a、3cm 以下の分化型 T1b(SM1)で脈管侵襲が陰性の場合はリンパ節転移の危険性が極めて低いことが知られています。しかしこの結果を、違う病院を背景に発生するがんが混在する食道胃接合部がんや、胃とは違う壁構造を有する食道から発生するバレット食道がんにあてはめることができるかどうかはわかっていません。

研究の意義：

食道胃接合部腺がんと食道腺がんの患者さんにおいて、どのくらいの割合でリンパ節転移の頻度があるか、またリンパ節転移に対する危険因子などを調べます。危険因子が明らかになれば、転移の危険性が低いものに内視鏡治療を行い、転移の危険性が高いものには外科切除を行うことが可能になります。最適の治療を提供するために研究の意義は大きいと考えます。

目的：

本研究は、食道胃接合部腺がんと食道腺がんの患者さんにおいて、どのくらい

の割合でリンパ節転移の頻度と、リンパ節転移に対する危険因子などを調べることを目的としています。将来的には、この研究データの結果が食道胃接合部腺がんと食道腺がんの診療に携わる医師や患者さんに広く利用され、より効率的な治療を進められるようになると考えております。

方法：

本研究は、日本全国の食道胃接合部腺がんと食道腺がん治療の専門病院やがん診療連携拠点病院を中心に、資料となるデータ（診療情報）を研究事務局に収集する形式で行われ、大阪府立成人病センターが研究事務局を担当しています。

当センターでは 2000 年 1 月 1 日から 2012 年 12 月 31 日の間に当センターにおいて外科切除あるいは内視鏡切除を受けられた食道胃接合部腺がんと食道腺がんの患者さんの診療録より、食道胃接合部腺がんと食道腺がんについての必要な情報を収集します。情報収集の作業に当たる人員は医師をはじめとする医療知識のある研究者です。この作業で収集した情報を通じて、食道胃接合部腺がんと食道腺がんにおける外科切除あるいは内視鏡切除の内容を検証します。

個人情報保護に関する配慮：

閲覧する診療録には個人情報が含まれますが、患者さん個人が特定されないやり方で情報を収集します。対象となる患者さんの識別は本研究専用に別途割り振られた研究番号を使って管理し、個人情報が院外に出ることはありません。患者さん等からのご希望があれば、その方の診療録は研究に利用しないようにしますので、いつでも次の連絡先まで申して出てください。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

〒104-0045　東京都中央区築地 5-1-1
国立がん研究センター中央病院　内視鏡科　山田真善
FAX 03-3542-3815 / TEL 03-3542-2511